
岩槻琥珀と鬼眼探偵

氷雨水夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

岩槻琥珀と鬼眼探偵

【Nコード】

N6918L

【作者名】

氷雨水夜

【あらすじ】

曰く付きな物語を望む者、岩槻琥珀。性別、目的、その他諸々の正体は一切不明。こんな“存在”が最初に出会った非日常は、魔物の眼、通称『鬼眼』を持つと言う者たち。魔と恨みと曰く付きが絡み合い、“存在”が望む話は完成する――。奇天烈、奇天烈、摩訶不思議なファンタジー、『曰く付き』シリーズ第一弾、ここに開幕。

イわくつきのプロローグ。（前書き）

とうとうやってしまいました、『曰く付き』シリーズ。

これは、前に短編で書いた『曰く付きな箱歌』の語り部さんの話です。

性別不詳キャラは文での表現するにあたって大変ですが、頑張りマス。

イわくつきのプロローグ。

岩槻琥珀^{いわつきはく}は“曰く付き”が口癖だ。

他に何か言うとすれば、外見は20を超えるか越えないかの境目さらには中肉中性で性別の判断をしかねる。声が女とも男とも言ってもいい程だから、尚更。

後は謎だらけ。

人であるのか、その形をした化物^{なり}なのかもわからない。

善人なのか、悪人であるのかですら、わからない。

——否。善人であり、悪人でもあるのかもしれない。

時に善いことを。時に悪しきことを。それが琥珀と言う存在だからだ。

彼は、いや彼女かもしれないが、琥珀が求めるのは『曰く付き』な非日常。

それに目的や理由があるのは定かではない。

“曰く付き”はいつも突然現われる。

善悪問わず、どんな手を使ってでも。『曰く付き』な非日常を得るために。

もしかしたら、貴方とすれ違った赤の他人とも言うべき人物の中に“それ”が……

破壊、痛快、懲戒。掌握、暗躍、疑惑。

嘔吐き、魔憑き、曰く付き。

岩槻琥珀と言う生き物の、不可思議、奇天烈、非現実的な、物語

の扉が今ここに開かれた。

イわくつきのプロローグ（後書き）

プロローグなので短めデス。短すぎたかもしれません。むしろ短い
ですネ。

『黒白』の狼の王様と名前が一緒ですが、関係ありません。赤の他人です、ものすごく他人です、気にしてはいけません。名前被りさせる気は全く無かったんデス。

いつか、短編でやっていた『箱歌』での話や、『道化』での話も取り入れたらいいなと思ってマス。

次話から鬼眼探偵の本編に入りたいと思います。琥珀がウザいと思うかもしれません。それでも、曰く付きシリーズ、これからよろしくお願いします。

ワざわい始まりへは終り」

市立空峰そらみね高校。

この高校は、いや、この世界には二種類の人間が存在していた。何の変哲も無いただの人と、一部、人とは異なる“眼”を持った人。

魔物の眼とも、鬼の眼とも言われるそれは『鬼眼きがん』、もしくは『奇眼』と呼ばれる。

そんな彼らは見た目は普通の人間と変わらない。

“目”と“眼”の違いと言うだけで、他は何も変わらない。

しかし、彼らを悪魔や化物だと言って差別的に見る者もいる。

正直な所、この世界では『鬼眼者』はその眼から、大げさな話、あらゆることを見逃さないとされている。それ故、警察や報道機関などの職業は彼らを尊重し、優先的に自分たちの仕事に入れようとしている。

つまり、人によつては『人類の先を行く者』と言い、『国を動かす為の道具』と言う。

先日は彼らに対し、総理大臣が暴言を吐いたと言われている。

さて、鬼眼についてはこれくらいにして、話を空峰高校に移そう。

この高校は一見、何のへんてつもない高校。この地域ではそれなりの学力で入ることができ、評判も上々。何かの大会では中の上くらいの成績を修めている。

ここまでは他の高校と変わらない。

変わるのは、鬼眼者とただの人間との割合。

鬼眼者はまだ世界にあまりいない。

なので普通の高校であれば、学校生徒の鬼眼者は1：9の1にあたるくらいである。

しかし、この高校は、6：4の割合で、“鬼眼者が普通の人間より多い”のである。

どうしてなのか、定かでは無い。

学園側が何かをしていると言うことは確かなのだが。

とにかく、鬼眼者が多いせいか、この高校の特有の部活があった。

『鬼眼倶楽部』

条件は、鬼眼者であり、何が起ってもあまり動揺することがない者。そして、入部試験に合格した者。

試験内容は謎に包まれている。

そんな試験に合格し、この部に入っているのは、たったの二名。

顧問のことを考えれば、三名。

条件なので当然とも言えるが、彼らは鬼眼者である。

それぞれが、それぞれの能力を持つ。

彼らの活動は表向きは『便利屋』である。

そう、あくまで“表向き”だ。

裏の顔は、また後ほど。

それでは、再び話を変えよう。

今度はこの部員と顧問について。

篠宮菜々しのみやなな。空峰高校二年。性別は女。性格は明るい方ではなく、むしろ暗い。相手が親しいか親しくないかによっての温度差が激しい。世界に対して絶望している。

次に、わたしあきら渡旦。渡と言う苗字のせいか、旦の字を『わたる』と誤読されがちである。篠宮菜々と幼なじみにして、同じく二年生。性別は男。菜々と性格が真逆で明るい。空気をわざと読まない。

そして、顧問の華山孝浩。かやまたかひろ数学担当の教師。性別は男。『俺様至上主義』を正義だとして言っているが、背が低く童顔な為、悪ふざけをする子供のように見られることを気にしている。

この三人が居てこそ、この便利屋、鬼眼倶楽部が成り立っている。

ちなみに部活として活動する以上、部長が必要なのだが、活動と同じく表向きとして渡がやっているだけである。

顧問もまた然りだが、華山が俺様な性格上、裏表関係なく顧問もとい『真の部長』を自称している。教師が部長を名乗れる訳がなく、あくまで自称だ。

これより、この者たちをとりまく物語が始まる。

——鬼眼倶楽部部室。

「……旦、いる？」

少女の声。どうやら部員の1人、菜々のようだ。

「先に行ってるって言ってたのに」

彼女は1人ごちて部室の奥に進む。

「どーーーーんっ！」

「……！」

背中に強い衝撃が来てバランスを崩しそうになる。振り向くと少年が立っていた。彼が旦だろう。

「あははー、吃驚した？扉の後ろに隠れてたんだー」
悪びれた様子など全く見せずに彼は言う。

「驚いた。……けど、相変わらずだね」

「菜々も相変わらず驚いたとは思えない落ち着いた反応だな」

それでも内心は驚いている、と彼女は言葉を返す。

それに対して、そっか、と笑う。

普通の会話。平穩かつ狂乱なことなど全くない会話。穏やかな会話が二人の間で続いていく。

そんな雰囲気をぶち壊す声が部屋中に突如響いた。

「お前ら、いちゃついてんじゃねえ」

「あ、華山先生。それといちゃついてません」

「あ、孝ちゃん。いちゃついてすみませーん」

二人とも声の主である顧問の華山孝浩に応じる。

「篠宮、どうみてもいちゃついてるようにしか見えねえよ。気を付けろ。渡、孝ちゃん呼びはやめろ。俺様とあるう者が余計に生徒になめられるだろうが」

「いやいや、なめられるのは身長のせいっすよー。はい、牛乳」

「わーい、ありがとー……なんて言うと思ったかあっ！牛乳はとつくの昔に試したわっ！」

二人は、試したのか、とは思ったが口には出さなかった。

「それより、今日は何か活動あるんですか？」

「ああ。それも“表”じゃない。“裏”だ」

「久しぶりっすねー。最近は学園の猫が逃げただの、落とし物を探してだの、平凡なものばっかだったし」

何故か背伸びをして軽く体を動かしながら言う。

「久々に本気、出していいんすよね？」

「本気を出してもらわねえと困るんだよ」

それだけ、彼らの裏の仕事は大変なのだ。内容は“警察がらみ”の事件であるから尚更。

「今回はどんな内容なんですか？」

「窃盗事件とか、暴力沙汰とか？」

今まで裏としてやってきた例である。警察がらみと言っても、やってきたのはそこまで深刻ではない事件だった。

「どーも依頼は殺人事件らしい……しかも学園内での出来事だ」

それをあまりにも普通に言うせいで重要そうに聞こえない。明らかに重要な内容であるにも関わらず。

「でも学園内で殺人なんてことになったら俺たちは朝礼かなんかで言われてもおかしくないんじゃない？……？」

「何でも被害者が理事長様の娘だとよ。大事にはしたくないから密かに調べて犯人を見つけて欲しいそうだ」

「何ですかその私的な理由。あれ、そういえば理事長の娘って生徒会の役員をやってませんでした？その理事長の子供という名声と権力で『影の生徒会長』と呼ばれてるって聞いたことがあります」

「よく知ってるな、それ」

まあ……、と言葉を濁しつつ菜々は少し俯く。静かにしていれば噂話が聞こえてくるし、“一人”で居たならば聞きたくない言葉でさえも尚更聞こえる。詳しいことは聞かれたくないというのが菜々の本心だった。

「ま、とにかく詳しいことは同じく隠密に動いてくれる警官が来たら、だな。部室の場所も言ってるし暫くしたら来るだろ」

孝浩はふかふかしていそうなソファに堂々と座り、偉そうにふんぞり返った。菜々も旦那もそれに相対して置いてあるソファに座った。少しして“それ”はやって来た。

「失礼します。私は今回の事件で皆様をサポートするよう言われました。岩槻いわつきと申します。よろしく願いします」

ワざわい始まりへは終り《（後書き）

セリフ多いですね…正直な所もう少しナレーション部分を増やしたかったデス。

途中まで琥珀の語り部でいこうとしたら話の切り替えがうまく出来なかったのでやめました。なのでどこか編集し忘れて変なところあるかもしれマセン。

ちなみにサブタイトルのアレは、禍始まり（わざわいはじまり）と禍は終り（わざわいはしまり）と言うことデス。何か無理がある気がしなくても無いデスが、今後似たようなことができたらやっていきます。

どうか心広く、物語を読んでほしいデス。

それでは、これより曰く付きを、始めます。

クいても遅いへ襲い》（前書き）

皆さん、お久しぶりデス。正直夏バテデス。

クいても遅いへ襲い」

入ってきた彼は、否、彼女と言えいいのだろうか。岩槻と名乗った人物は中性的な外見と声を持ち合わせており、性別を判断したい。

「えっと、失礼ですけど男性なんすか？それとも女性？」

旦の一言で岩槻は聞かれるのをさも知っていたかのように微笑んだ。

「ふふ。そんなことを聞かれるだろうとは思っていました。内密に動いてほしいと言うことなので私服で来てしまいましたが、こんな格好では余計にどちらかわかりませんよね」

そう言う通り、その格好は男性とも女性ともとれるラフな格好だった。

「まあ、よく誰からも性別がわからないって言われますからね、気にはしませんが。一人称も『私』ですから、女性だと思う方もいるのですが、私の性別がどちらかなんて知っても何かが変わるわけではないでしょう。だから私がどちらの性別かを答えるとするのならば『秘密』ですよ。貴方方のご想像どうぞ」

「ご想像で、って言われてもなあ……」

「私は他のことを聞きたいんだけど……」

菜々は言い辛そうに岩槻をちらりと見やる。

その眼に何を言いたいのかわつたのか、先程のように微笑んだ。

「言いたいことがあるなら、是非どうぞ。お互いの間で何かモヤモヤした感情があつては捜査に害を為すかもしれませんし、ね」

その言葉で意を決したのか、菜々は問うた。

「あなたは、『鬼眼者』なんですか？」

この鬼眼者がいる世界にとって、その質問はあまりにもおかしい質問だった。

何故なら、基本的なルールとして、鬼眼者同士では『鬼眼』の力

が通用しない。力が使えない相手であつたならば、当然その相手も鬼眼者である可能性が高い。

それを、菜々はあえて聞いた。とてもおかしい感覚に襲われたためだ。

「……ふふ。質問に質問で返すのはあまりしたくはないのですが……。その眼には私の何も映さなかった、そういうことで聞いたのですよね？」

はい、と、少し小さな声で彼女は応じた。

旦は、そう言われてから今更気付いた様子で「あ、本当だ」と勝手に納得していた。

孝浩は何故か不機嫌で苛ついた面もちだった。

「私は、ただの警察官、ですよ。あなた達のような『眼』は持っていません」

「でも、視えないのは……？」

岩槻が嘘ついたようには見えなかった。

だが、確かに視えなかったのだ。一体どういうことなのか、悩んでいるとイライラしながら孝浩が口を開いた。

「当たり前だろ。そいつは“意図的”に視えないようにしてやがるんだから」

生徒2人が「え？」と言うのと同時に岩槻は「へえ……」と零した。

「鬼眼者でもねえのに視えなくさせるだなんて、常人がはいはいと出来る芸当じゃねえけどな。まあ、拒絶したいと思えば中には出来る奴がいるってこと、意外と知られてねえからお前らが知らなくても不思議じゃないけどな」

「ただ……」と岩槻の方を睨むような目で見る。

「てめえは何者なんだよ？ただの警察官がそんな真似できる訳がねえだろうが。言っておくが、例え拒絶してもこっちの能力が強けりや視ることなんて出来るんだぞ」

「おやおや、私は普通の警察官だと言っているじゃないですか。そ

れで無理に視られるだなんて……理不尽だと思いませんか？」

岩槻は困ったような仕草をした。孝浩はさらにイラついたらしく、立ち上がって岩槻を見据えた。

「理不尽ねえ……。鬼眼者を拒絶出来るやつに理不尽も何もねえだろうがよ。俺様の能力でてめえの正体現わしてやるよ！」

華山孝浩の、鬼眼者としての能力、——相手の過去を視る能力。

孝浩の、ほのかに茶色がかった黒の瞳が、澄んだ蒼い色へと変わる。

「……………！！」

岩槻の『拒絶』が強いのか、孝浩はさらに力を強めているようだった。

あまり無理をすれば鬼眼者自身の身体を壊しかねない。

「……………！？」

『い……共に行……………ぞ、我が……………よ』

『……………ざ互いに……………ようぞ、我が……………よ』

「こ、れは……！？」

孝浩の脳内に広がる光景。

2人の男女が何かを言っている光景。

2人の間にはあどけない表情をした子供がいた。

その後、何度も背景が切り替わる。

どの光景にも当てはまるのはおそらく同じ子供が存在すると言う

こと。

前半は純粹に笑って、後半は泣いて、泣いて、最後に――笑った。どこか重要な何かが消えてしまったように。とても大事なモノが壊れてしまったように。

狂おしい、とても純粹だけれども恐ろしい笑みを。

「……っ!!」

そこで孝浩の意識は現実へと戻された。

「……はあっ……はあっ……」

息がとても荒い。まるで突然激しい運動をしたかのように身体が重く、思わず膝をつく。

無理を、し過ぎた。

「先生!!」

「孝ちゃん!!」

2人の生徒が駆け寄る。

「大……丈夫、だ」

そう言つと目の前に居るであろう岩槻に向けて言った。

「お、前は……確、かに鬼眼者じゃ、ない……。けれど、結局は俺様たちと、同じ、化物、なんだろ?……いや、むしろ、それ以上の……可哀想な……や……っ……だ」

孝浩は熱でもあるのか、意識が朦朧としていた。

それでも若槻を見やると、驚愕の表情であることを確認した。

「くっくくく……。そん、な、顔も……。出来るんじゃ、ねーか……」
「……孝ちゃん!？」

視界がどんどん闇に包まれていく。意識がどんどん塗りつぶされていく。

孝浩は力が入らないそれに身を任せ、倒れた。

クいても遅いへ襲い》（後書き）

本当は事件について触れようかと思いましたが、今回は鬼眼者の能力というかルール＋先生の能力説明の回になってしまいました。

岩槻さんこと琥珀さんの過去で出てきた『内のセリフは雑音で聞こえなくなってるのですが、あれをちゃんとした文で書くと琥珀に関係している『何か』を感じてしまう人が居ると思ったので隠しました。琥珀の過去についてはこれからの『岩槻琥珀』シリーズで言っていく予定デス。

しかし、先生は身長の意味も込めて牛乳をもっと飲んでカルシウム摂取した方がいいと作者なのに思ってしまいマシタwww

それでは、次回から事件に入れたらいいと思っていマス。お願いシマス♪

ツミは無しへ話

「ん……」

孝浩は目を覚ました。未だに身体は重く、少し頭が痛い。

「旦那、先生……起きたよ」

「良かった……」

部員2人が心配そうな顔で覗き込んできた。

「お前ら……あれから、どうした？ここは？俺様はどれくらい意識を失ってた？」

そこへ2人のどちらでもない声が飛び込んで来た。

「別に、何もありませんよ。彼ら2人が貴方が起きるまで待つと言つてらしたのでお待ちしておりました。なので特に事件の話はしていません。……ちゃんと周りを見たらどうです？ここは変わらず部室の中ですよ。貴方は30分間、意識を失っていたのです」

「30分……か」

「私の過去を無理して視ようとしたとはいえ……、意識を取り戻すまでたつたの30分とは、貴方の方こそ化物のように……」

どうも岩槻は己の過去を視られたことに苛立っているらしい。

孝浩はそんな態度に思わずククツと笑ってしまった。

「何かおかしいことでも？」

「……いや、気にするな。てめえの過去も、存在も誰にも言う気なんざねえからよ」

「……本当に？彼らにも？」

「ああ」

少し安堵したように近くににあった椅子に岩槻は座った。

旦那と菜々は分らないが、過去を垣間見た孝浩にとってはその姿が面白くて仕方がなかった。自分と同等、もしかしたらそれ以上の化物とは思えなかったからだ。

生徒2人は、岩槻の過去が気にはなつたが、本人が詮索されるこ

とが嫌そうなので、まるで気にしていないと言う風に振る舞った。

「しかし、まさかてめえが……」

笑いを堪えているのか孝浩の身体が小刻みに震える。

「……言わないと言った矢先にそれですか」

「冗談だ。それよりもそろそろ事件について話してくれるか？」

岩槻が溜息をつきながらも渋々話し始めた。

「被害者は理事長の娘、鬼塚香織^{おにづかかおり}。死因は毒殺。何でも最近風邪を

引いていたらしく、薬を服用していた、とのこと。それを知っ

ているのは、親である理事長、鬼塚辰人^{おにづかときひと}。親友の飛鷹飛鳥^{ひだかあすか}。生徒会

長の国枝透司^{くにえだとうじ}。部活の仲良いと言う噂の後輩、帯刀恭美^{おびなたやすみ}。以上4名。

先程の4名の中に犯人が居ると思われています。それと最初に毒殺と言いましたが、司法解剖の結果が出ていないので正直な所、あくまで状況から察した推測です。恐らく犯行はカプセル状の薬と言うことでそこに毒薬を入れて服用した……、そういう流れではないかと。中には被害者の自殺と言っている者も居ます」

孝浩は少しの間、考える仕草をして菜々に顔を向けて言った。

「……菜々、容疑者4人について今すぐ調べられるか？」

「10分待つて下さい」

菜々はそう答えると、席を立ち、隅に置いてあったノートパソコンに電源を入れた。

「あの、俺は何してればいいっすか？」

「とりあえず現時点でわかってることをメモしておけ」

「了解ですっ」

旦はどこからかメモ帳を取り出して、先程聞いた事をテキパキと書いていく。

「さて、岩槻さんよお。俺様は少し寝させてもらっぜ。誰かさんのせいで疲れちまったからな」

「その誰かさんの過去を無理に視ようとするからいけないのではと思いますか……。寝ていた方がいいという判断は賢明だと思います」

孝浩は岩槻がそう言ったのを聞くやいなや、ビシッと指さした。

「それならこいつら2人のこと頼んだぜ、岩槻さん」

岩槻は「はい」と、短く返事をする。

その声を聞いたようで静かに眼を閉じた。ほんの少しすれば、スーと安らかな寢息を立てているのが聞こえてきた。

カタカタとキーボードを打つ音がリズム良く聞こえ、書く時に聞こえる特有の音と、寢息の音が混じる。不思議と日常の音は不協和音とはならないと改めて思わされてしまう程に。

岩槻がそう、感慨にふけっていると少女が声をかけてきた。

「えつと……岩槻、さん？」

「あ、はい。何か……わかりましたか？」

菜々は膨大な量の紙の束を持っていた。

「あの、それ今の短い時間で調べた奴ですか？」

「……これは、その調べた資料をコピーするのに必要な分、です」

「……え？」

「あー、岩槻サン、こっちも軽くですが纏めましたよー」

旦がヒラヒラとメモを揺らしながら言う。

そのメモには事細かに分かりやすく纏められている。

一回聞いただけで、こんなに簡単に纏められるものなのか。

岩槻は、人外とも言えるこの存在は、驚いた。しかも今日一日で二度も。

万能過ぎるのだ、この世界の鬼眼者たちが。もしかしたら彼らに限ったことなのかもしれないのだけれど。

岩槻琥珀は感情が高ぶってきそうになるのを押さえていた。

とある理由で『曰く付き』の話を探す存在にとっては、それも極上の話を探す化物にとっては、もしかしたらこれが極上の話なのではないかと思わせた。

化物の拒絶すら越える男、暗記能力に優れている少年に、短時間で多大な量の情報を収集できる少女。並はずれた、人間。

人間もまだまだ分からないことが多く、飽きることの無い面白い存在だと。

彼とも彼女とも言えないこの存在は、ひっそりと微笑んだ。

ツミは無しへ話（後書き）

更新！。前フリが長いことになっていると後悔してイマス。正直に言うところリックが浮かんでないだけデス、ええ。……トリックもないことにするかもしれませんが……。どうなるかは今後の展開もとい水夜のインスピ次第デス。

来ないデスカね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6918/>

岩槻琥珀と鬼眼探偵

2011年2月20日22時10分発行